

テクネ・マクラ「芸術は永し」

# TEXNH MAKPA

女子美術大学歴史資料室ニュースレター

第 8 号



私立女子美術学校日本画科授業風景 大正3年（1914）頃

## 特別寄稿

# 横井玉子と建学の精神について

梶原 恵理子 (女子学院資料室 司書教諭)

女子美術大学の建学の精神は女子学院と似ている、そう思ったのは2000年に行われた創立100周年式典で、女子美の歴史を紹介する映像を拝見した時であった。当時、同大学同窓会と資料のやり取りをしていた関係で、その席に招かれたのである。

そして、今春の展示を機会に式典でも映し出された横井玉子の写真のオリジナルを寄贈させていただいた(本誌4頁写真参照)。

女子学院と似ていると感じたのは特に建学の精神の中の「女性の自立」「女性の社会的地位の向上」という言葉である。

横井玉子は新栄女学校から女子学院を辞するまでの間に、矢嶋楯子とミセス・ツルー(Maria P. True)の2人に受けた影響は大きいと思う。

そして、この2人の土台となっているのはキリスト教であり、楯子には横井小楠の思想の影響もある。これらが2人を通して玉子の中に大いなる影響を与え、女子美の建学の精神が女子学院と似ていることになったのではないかと思った。

では、まず矢嶋楯子から紹介したい。矢嶋楯子は天保4年

(1833)に現在の熊本県益城町に生まれる。矢嶋家は代々郷士の家柄で、父直明は惣庄屋として優れた治世を行っており、父の代には「矢嶋領に入るとすべてが整っていた」と評されるほどであった。また、矢嶋家の家憲は「勤勉・質素・努力」であったという。

この矢嶋家に思想的に強い影響を与えたのが、玉子が結婚した左平太の叔父で義理の舅でもある横井小楠である。

矢嶋楯子の兄は小楠の弟子で、その姉妹たちの内、つせ子(五女)は小楠の妻に、久子(四女)、順子(三女)、そして楯子(六女)もそれぞれ小楠の弟子と結婚している。

益城町では特に順子(熊本女学校創立者)、久子(徳富蘇峰・蘆花の母)、つせ子(横井小楠の妻)、楯子の4人を「四賢婦人」として記念館や碑を建て、その功績を称えている。

楯子は当時としては晩婚の25歳で林七郎と結婚するが、酒乱でDVであった夫に、妻の方から離婚を申し出るという、当時としては考えられない行動に出た。その後、40歳の時、

東京で民部省に勤めていた兄の看病を理由に上京し、教員免許状を取り、小学校で教え始める。この頃、妻子ある男性との間に娘が生まれ里子に出し、その後、養女として迎えて育てるという経験もする。

ちなみに作家の三浦綾子は、楯子の生涯を描いた小説『われ弱ければ』の中で、この経験が後の楯子の活動に大きな影響を与えているとしている。

そして明治11年(1878)に新栄女学校で教師を探していたミセス・ツルーと出会い教師になる。この新栄女学校に後に横井玉子が教師として勤めることとなる。

その後、楯子は番町にあった桜井女学校の校主代理となり(明治14年)、新栄女学校と桜井女学校が合併して女子学院となった明治23年(1890)には初代院長となる。

その間、明治19年(1886)には東京婦人矯風会を設立し、明治26年(1893)には全国組織として日本キリスト教婦人矯風会の初代会頭となる。この矯風会の活動には、楯子の姉や姪たちが多く名を連ねており、そ

の事務所は楯子の院長室であったため、玉子も大きな働きをする。

楯子にとってこれらの活動の原動力となったのはキリスト教であり、もう1つは40歳になるまで過ごした熊本で、兄や姉妹の夫たちから学んだ横井小楠の思想だと思う。

まず、キリスト教だが、楯子は寄宿舎でミセス・ツルーと共に生活する中からキリスト教に導かれ、明治12年（1879）に受洗する。奇しくも玉子も同年に受洗している。

ツルーは寄宿舎で寝食を共にし、上級生が下級生の面倒を見るなど、授業だけでない生活に根差したキリスト教教育を目指していた。

玉子も寄宿舎による教育を目指していたというが、これは同様の効果を期待していたからなのではないだろうか。

ツルーは新栄女学校・桜井女学校・女子学院のみならず、日本女性のために女子教育を充実させたいと考え、地方の女子校の支援も惜しまなかった。

そして、女性の自立を促し職業につながる教育の器として、幼児保育科（明治17年）、そして看護婦養成所を設置（明治19年）、働きながら学べる女子独立学校の設立（明治22年）にも尽力した。

このようなツルーを見ていた玉子が、自分なりの職業につな



矢嶋楯子



ミセス・ツルー

がる女子教育の器として、美術学校の創立を目指し、その建学の精神に「専門の技術家・美術教師の養成」を挙げたのは当然のようにも感じる。

ツルーは明治20年（1887）に『女学雑誌』主催の講演で次のような言葉を述べている。「あなた方は女として如何なる理想を持って生きるか。世俗的幸福だけを求めるのではなく、高尚なる志を活かす真の力を養成しなさい。自分のつとめを怠ったり、自分に力があるのに他を助けなかった時苦痛を感じるような女性になりなさい。一人ひとり、活かされる道や与えられた器は違うが、他人や社会のために働くように」

「高尚なる志」と題されたこの講演は、当時の日本の女性たちの働きに大きなエールを送ったものであった。

そして、もう1つの原動力が横井小楠の影響であろう。小楠の思想の中心には、「公の政治」すなわち、私利私欲を満足させるのみならず、日本をよくするという考えがあったと思う。だから、楯子は日本女性のために

働くツルーと共に、広く日本女性の地位向上や自立を目指して女子教育と社会事業に力を注いでいた。

女子学院院長時代に楯子は生徒たちに「あなた方は聖書をもっています。だから自分で自分を治めなさい」といい、校則は設けず、自由・自治・自立を求めていた。

『明治女性史』村上信彦著に明治期の女子学院の校風が次のように書いてある。「納得できぬものには疑問をもち、満たされなければ抵抗する心構えを植えつけてくれたのである。女らしくあきらめたり、泣き寝入りしないのがこの学校の校風なのだ」

玉子が、官立の東京美術学校（現東京藝術大学）には女子の入学を許されていなかったことに、奮起した姿が目に見えかぶ。

このように、共にキリスト教と横井小楠の思想の影響を受けた横井玉子と矢嶋楯子だから、同じ土台の上に建った2校の建学の精神が似ている、と感じたのかもしれない。

## 寄贈報告

# 横井玉子写真寄贈報告

高橋 直子 (歴史資料室学芸員)

この度、女子学院様より、同学院にて長年ご所蔵されていた本学創立者・横井玉子の写真を本学歴史資料室にご寄贈いただきました。歴史資料展示室では2014年4～7月に「横井玉子・藤田文蔵と私立女子美術学校創立」展を開催しましたが、その準備段階において玉子がかつて教員や寄宿舎舎監を務めた女子学院様に調査を依頼しました。調査にあたっては同学院資料室教諭・梶原恵理子先生にご教示いただき、ご協力を賜りました。さらには、本学歴史資料室の活動をご理解いただき、御厚意により本資料のご寄贈を賜りました。

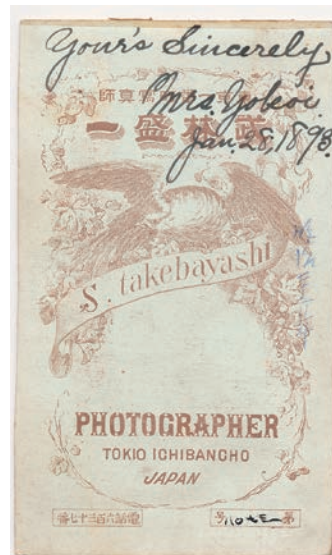
玉子は、明治33年(1900)、他3名と共に本学を創立させた後、わずか3年後の明治36年(1903)に病気により逝去します。そのためか、あるいは、後年の校舎火災などによって焼失したのか不明ですが、本学で撮影された玉子の写真は残されていません。玉子に関係するその他の資料についてもわずかで、本学の監事兼舎監として手腕を発揮したであろう玉子の様子を窺い知ることは困難な状況です。本学創立以前に勤めていた女子学院での様子は、『女子学院五十年史』に収録された卒業生たちの回想の中にみることができま

す。

「背のすらりと高い色白の美しい上品な御方で、先生の眉と御眼は今も彷彿として眼前に浮かびます。女礼式裁縫料理の先生で【註1】、グラハムの舎監をして居られました。お客様がよくおありになって、金曜日の夜など忠信蔵【註2】などの本を読みに行つて、お菓子や果物などの御馳走になるのが、本当に嬉しい御座いました」【註3】

当時、女子学院には桜井部とグラハム部という2つの寮があり、玉子はグラハム部の舎監を務めていました。同回想によれば、両寮生は1ヶ月に1回、「文芸会」を開催。金曜の夜、矢嶋楯子院長(当時)や玉子を招いて劇などを上演。玉子は生徒の演技に「眼を真赤に」して感動したと書かれています。ある時には劇の衣装を、牛込教会長老を務めていた本学の創立者の一人である藤田文蔵から借りたことが記されています【註4】。玉子と文蔵の出会いについての詳細は明らかにされていませんが、当時、牛込教会に通った女子学院生徒も多く、教会活動を通じて知り合ったと思われます【註5】。

最後になりましたが、ご寄贈いただいた資料は、創立者・横井玉子を知る上で大変貴重な資料であ



横井玉子写真(表・裏) 明治26年(1893)

り、ご尽力下さった風間晴子院長先生、梶原恵理子先生をはじめ関係者の皆様にご心より御礼申し上げます。適切に保管し、本歴史資料室の今後の活動に活用していきたいと思っております。

### 註

- 1 女礼式、裁縫、料理の他、図画の授業も担当した
- 2 「忠臣蔵」の誤記か
- 3 戸川秀子氏回想『女子学院五十年史』女子学院同窓会、1928、191頁
- 4 同書204頁
- 5 大濱徹也『女子学院の歴史』女子学院、1985、300頁

ニュース

## 「平成26年度収蔵資料展 収蔵資料にみる女子美の歩み」 展開催

高橋 直子（歴史資料室学芸員）

女子美術大学歴史資料展示室では、現在、「平成26年度収蔵資料展 収蔵資料にみる女子美の歩み」展を開催しています（2014年9月4日～2015年3月15日）。本展では、新制大学発足時（昭和24年／1949年）より1960年代までの資料を中心に展示しています。本稿では展示資料やその時代の出来事を紹介します。

明治33年（1900）に私立女子美術学校として創立した本学は、昭和24年（1949）、学制改革により改めて新制大学女子美術大学として発足されます。翌25年（1950）には、女子美術大学短期大学部が併設されます。女子美術大学には芸術学部が設置され、その中に美術学科（日本画科、洋画科、図案科）と服飾学科（裁縫科、手芸科）が設置されました。しかし、翌年には、服飾学科（裁縫科、手芸科）が廃止。裁縫科は同年発足した短期大学部の服飾科として設置され、手芸科は工芸科として芸術学部に残ることとなります。これにより芸術学部の構成は美術学科（洋画科、日本画科、図案科、工芸科）となります。本展では、工芸科の資料として《女子美術大学工芸科染織工芸展布製ポスター》【写真1】などを展示しています。昭和32年（1957）から約30年間、

工芸科では教育の一環としてデパートにて学生作品の展示・即売会を行いました。本資料は日本橋三越において開催された染織工芸展ポスターで、糸を染め、手織機で織った布に型染で文字を染めたものです。同じく展示中の女子美術大学学友会新聞部編集『女子美大学生新聞』第1号（昭和30年5月発行）には、校舎の老朽化や学生数増加にともない、木造校舎を鉄筋コンクリート構造校舎へ建て替える計画について書かれた記事が掲載されています。記事によると、工事は、昭和27年（1952）よりすでに始められており、今後の設計は福田良一本学教授が行う予定であると記されています。この記事が出された翌年4月11日、地上2階地下1階の本館（木造）から出火し、本館の教室など計848坪の他、別館を含め1,025坪が焼失。本学はこの火災で延床面積の31%の校舎を失います。この後、保護者や同窓会による総額1億円の寄付等の協力を得て、鉄筋コンクリート構造校舎への建て替え計画がさらに進められていくこととなります。昭和35年（1960）、本学は創立60周年を迎え、記念式典の挙行や『女子美術大学略年史』刊行などの記念事業が行われました。本展では、現在



【写真1】女子美術大学工芸科染織工芸展布製ポスター 昭和41年（1966）

も杉並校舎に設置されている60周年記念碑板の原型を展示しています【註1】。これは、当時、海外研修で乗松巖教授（当時）がギリシャに赴いた際、黒田音四郎大使（当時）の厚意によりギリシャの人々から本学創立60周年を記念して贈呈されたものです。素材はパルテノン神殿と同様の石切り場であるペンテリコンの大理石で、表面にはギリシャ語で「人生は短く芸術は永し」と刻まれています。この言葉は、毎年、学生に配布される「女子美手帖」の扉ページに掲載されています。本展では他に本学や学生を取材した雑誌記事や女子美祭ポスター（複製）なども展示しています。本展により当時の学生の様子や本学の雰囲気を感じていただければ幸いです。

参考資料

「校舎焼失と復興」『女子美術大学百年史』学校法人女子美術大学、2003、143-152頁

註

1 平成22年（2010）寄贈。詳しくは、次の記事を参照  
内藤幸江「女子美術大学創立60周年記念碑板原型のご寄贈」『テクネマクラ』第2号、2010

## 女子美人物伝

たけむらこうあい

# 武村耕靄 (1852-1915) 初期日本画科教員

高橋 直子 (歴史資料室学芸員)



武村耕靄《百合図》絹本着色  
明治20-30年代 お茶の水女子大学所蔵

本学における日本画教育は明治34年(1901)開校時より百十余年続く伝統を誇ります。初期の日本画科教員である島田友春(明治34~35年在職)や河鍋暁翠(明治35~38年頃在職)については、大柳久栄氏をはじめとする先行研究があります【註1】。本稿では、同じく初期日本画科教員をつとめた、女性画家・教育者の武村耕靄について紹介します。

武村耕靄は、嘉永5年(1852)仙台藩士・武村仁左衛門の娘として江戸芝口仙台藩邸に生まれます。本名は千佐(子)、貞子。幼少の頃より絵画を好み、最初は狩野探逸・狩野一信(狩野派)、文久2年(1862)より山本琴谷(南宗派)、元治元年(1864)より春木南溟、南華(谷文晁を始祖とする南北合派)に師事します。明治維新後、仙台に戻り、再び上京。輸出用の扇面に絵を描いて生計を立てる傍ら、横浜の共立女学校に通学。また築地にてメアリー・E・パークス女史に英語を学びます。明治8年(1875)には工部省内の製作寮女工伝習所(女紅場)で助教・通弁【註2】に就

任(翌年廃止)。同年、画家・川上冬崖に師事し、洋画を学びます。明治9年(1876)~31年(1898)、東京女子師範学校(現お茶の水女子大学)教員となり、図画・英語の授業を担当しました。また、明治19年(1886)には、共立女子職業学校(現共立女子大学)設立発起人の一人となります。その他にも東洋高等女学校(明治38~41年在職)、神田共立女学校(明治38年頃在職)で教員を務めます。図画教育において初めは鉛筆画を、明治20年代から30年代前半の普通教育において毛筆画教育が優位となった時期は毛筆画を教えました。このことは和洋の絵画を学んだ耕靄の多彩な才能を物語っています。画家としては、日展など多くの展覧会に出品。また、明治26年(1893)シカゴ万国博覧会、33年(1900)パリ万国博覧会、43年(1910)日英博覧会に出品するなど活躍し、国内外で高く評価されました。私立女子美術学校の日本画科教員には、明治35年(1902)頃就任し【註3】、37年(1904)6月病気のため退職します【註4】。本学での在職期間



金井確資著・発行『日本美術画家列伝』、1901より

はわずかではありましたが、近代日本の女子図画教育の先駆者として活躍した耕靄のもつ豊富な経験と技術は、本学の日本画教育や図画教育に生かされたことと思われます。

註

- 1 大柳久栄「河鍋暁翠と日本画科」『女子美術教育と日本の近代 女子美110年の人物史』学校法人女子美術大学、2011など。友春は、幕末から明治にかけて活躍した絵師・河鍋暁翠の弟子で日本画家。暁翠は暁斎の娘で日本画家
- 2 通訳のこと
- 3 武村忠編集・発行『耕靄集 下』1931、192-193頁
- 4 『読売新聞』1904年6月7日付

参考

共立女子大学・短期大学総合研究所主催「武村耕靄展」2011年9月20日~10月5日  
金子一夫氏講演「日本最初の女性図画教員―武村耕靄―」(共立女子大学にて2011年9月30日開催)  
『日本画をまなぶ―女子美術学校における日本画教育展図録』女子美術大学美術館、2010

## 歴史資料室日誌 2014年5月～2014年9月

### 5月

- 新1年生が受講する基礎学習ゼミ自校史教育を原聖歴史資料室長、高橋直子学芸員で担当（4～5月）。
- 相模原キャンパス2号館1階ロビーにて開催したパネル展「佐藤志津と私立女子美術学校再興展終了（1月22日～5月17日）。
- 「ニケの会」皆様 展示室見学。



見学の様子

### 6月

- 韓国水原市・華城博物館で開催された第4回羅蕙錫<sup>ナヘソク</sup>※学術大会にて高橋直子学芸員発表。
- ※大正7年(1918) 本学西洋画科高等師範科卒業。洋画家・作家



発表の様子



羅蕙錫ストリート・羅蕙錫像視察

- 平成26年度第1回歴史資料整備委員会実施。
- 埼玉県立新座総合技術高校生徒インターンシップ受け入れ。



資料カード作成の様子

### 7月

- 女子美術大学歴史資料展示室にて開催した展覧会「横井玉子・藤田文蔵と私立女子美術学校創立展」終了（4月4日～7月21日）。

### 9月

- 女子美術大学歴史資料展示室にて展覧会「平成26年度収蔵資料展 収蔵資料にみる女子美の歩み」開催（9月4日～2015年3月15日）。



展示会場

- 千葉県佐倉市立志津公民館主催「しづ市民大学」皆様 歴史資料室・女子美ガレリアニケ見学。高橋直子学芸員講演。



講演の様子



見学の様子

## 寄贈報告 2014年5月～2014年9月

作品・資料をご寄贈いただいた方の御名前を記し、感謝の意を表します。(寄贈順)

- 真下広生氏 柿内青葉関連資料等 36件
- 津田裕子氏 ポーラ文化研究所編『幕末・明治美人帖 愛蔵版』、ポーラ文化研究所編『結うこころ日本髪的美しさとその型』 2冊
- 井江ミサ子氏 井江春代作品・関連資料 1,717件
- 遠藤九郎氏 女子美テレフォンカード 14件
- 香山マリエ氏 香山マリエ著『貞子の恋』 1冊
- 順天堂大学医学部医史学研究室 順天堂大学175年史編纂委員会編『写真でみる順天堂史175年の軌跡』 1冊
- 立教学院大学史資料センター 立教学院百年史編纂委員会編『立教学院百年史』 1冊

## お詫びと訂正

女子美術大学歴史資料室ニューズレター『テクネマクラ』第7号(2014年6月13日発行)2頁におきまして語句の重複がございました。下記の通り訂正いたします。

### 【訂正内容】

2頁 中段 3～4行目

「明治33年(1900)パリ万国博覧など」を削除。

読者および関係者の皆様にご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。

## 歴史資料の寄贈について

女子美術大学歴史資料室では本学の学校史・教育に関する歴史資料の収集を行っております。収集にご協力いただける場合は、歴史資料室までご連絡ください。ご厚意に沿えない場合もありますので、あらかじめご了承ください。また、寄贈いただいた資料の取り扱いは、歴史資料室にご一任ください。

## 表紙写真

私立女子美術学校日本画科授業風景  
大正3年(1914)頃

大正3年(1914)3月発行の『女子美術学校第十八回卒業生記念帖』に掲載された日本画科の授業風景。公家あるいは武家女性の外出(旅)姿のモデルを囲んで写生している。本資料以外にも時代衣装のモデルを写生する写真があり、この時期、歴史画的要素を取り入れた人物写生教育に力を入れていたことがわかる。同書には、当時の日本画科を指導した教員として益田玉城、端館紫川、黒澤珠子の顔写真が掲載されている。

# TEXNH MAKPA 第8号

テクネ・マクラ 「芸術は永し」

女子美術大学歴史資料室ニューズレター  
発行日：2014年11月25日  
編集・発行：女子美術大学歴史資料室  
デザイン担当：竹田奈那子  
制作・印刷：株式会社 日相印刷

〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8 女子美術大学1号館1階  
TEL：03-5340-4658 FAX：03-5340-4683  
E-mail：heritage@venus.joshihi.jp  
URL：http://www.joshihi.net/history/

 女子美術大学